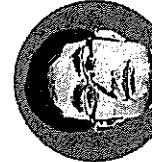


現代
ことば

藤原

辰中



いま、学生時代にお世話になつたのさんから立命館大学のやうを頂いてゐる。縦横ある名の大所蔵である。学生指導は3年ぶりで、アイデア豊かで元気な学生たちと話すのを毎週ひそかな楽しみにしている。友人や私どおりのままに議論するのが楽しい、と学生の一人が言ってくれた。最近、第一回目の懇親会をして、酒を飲みながら夜更けまでひとりん語り合つたばかりだ。

論著上

聞いても飽きない。私の知りがほしい以外ではない、いろいろ緊張状態も妙に心地いい。

突然だが、経済界のリーダー、企業の人事担当者に申上げたい。前職のときもそだつたが、やはり学生たる就職活動で学業のあいだで鳴を上げている。今年から職戦線解禁は後ろ倒しかねが、現場の感覚ではほんと効果はない。貴重な半年を

活で費やしてしまうのは、学生の人生、いや、社会にどうても大きな時間の損失である。せめて、学生の卒業論文が完成するまで待つてほしい。学生の人生を振り絞つたような論文を人事担当者に見せられないのは、私も学生も無念極まりない。最後の1年間、学生たちは仲間とともに卒業論文に打ち込む中で驚異的な伸びをみせる。しかし、この時期、就活のため1週間に1回のセミを体験することが重なり、指導が難しくなる。友人の発表に行けず、聞く・話す、という基本を養う機会も逸する。調査と読書の時間も少ない。

多くの学生たちが学問の面白さに気づくのは4年生であ

る。せめて11ヶ月間に学問の苦しみと喜びを充分に味わつてほしい、と願う。大学は英会話学校でも職業訓練校でもない。無人島で生活する自分を客観的に觀察し記述する困難に気が付いた学生などどんな哲学が芽生えるのか、自力での広告制作に行き詰まつた学生がどんな人文・社会学の理論と遭遇するのか、こんな緊張感ある営みは、大学で時間をかけてしか味わえない。

黒と白の「一眼」に身を包む学生を何度もいじつて選ぶ日本式就活に、外国の友人はしばしば驚く。人事担当者も、就活にこなして卒論に手をつけていない学生に何を研究しているか尋ねるが、そんな授業・職業史

就活は中途半端である。本論を企業に見せたりに見せられないと意欲的な学生は多く居ます。

たとえば、これはどう違う。学生は、専門の会社に卒論を転送する。気になつた学生にはコンタクトを取る。卒論の公聴会に訪れ、学生たちの話を耳を傾ける。卒論を読んで面会し、交渉を始める。時間が繊細なら、入社を半年遅らせてもらひではないか。採算と効率性を度外視して論文執事に打ち込む。だからこそ、学生たちの生き生きが卒論には直截的に現れるのである。

(京都大人文科学研究所准教授・黒川史也)

卷之三